

# はじめに

(神との関係における成長)

あなたがセブンスデー・アドベンチストとして育った人であれ、入信して間もない人であれ、『聖書研究ガイド』をたくさん読んだことのある人であれ、ほとんど読んだことがない人であれ、さらに、あなたが今、霊的にどんな状況にあらうとも、神との有意義な関係の中でいかに成長するかという主題は極めて重要です。

この主題は、あらゆる事柄に影響を与えます。神に対するあなたのイメージは、歪んでいたたり、ぼやけていたりしているかもしれません。もしそうであるなら、聖書研究を通して、より明確に理解できるように祈ってください。あなたは、私的な礼拝の時間(祈りと聖書研究)をどう刷新したらよいかと悩んでいるかもしれません。あるいは、神との関係に影響を与えるほかの領域について、思いを巡らしているかもしれません。例えば、誇りと謙遜、信仰と知識、罪と神の律法、悔い改めと赦しなどの役割について、また、心のかたくなさや挫折をどう乗り越えるか、ほかの人が神との歩みを続けられるようにどう励ますかといったことについてです。

神との関係は、あなたにとって最も重要な関係です。それを築き、堅固にし、できる限り強くすることを、遅らせてはいけません。この関係に取り組むべき時は、将来のいつかではなく、「今」です。この関係は、ほかのすべてのこと、つまり(あなたが既婚者であれば)結婚生活に、(あなたに子どもがいれば)子育てに、友人関係に、金銭的決定に、余暇に、将来の夢に……、そして、言うまでもなく永遠の未来に影響を与えます。

神が人類と関係を持ちたいと願っておられるという主題は、聖書の至る所に見られるので、この重要な主題を学ぶために、さまざまな視点、物語、聖句を選ぶことができます。しかし、『聖書研究ガイド』の紙面の都合上、限られた数しか取り上げることができません。

たとえ今、あなたと神との関係がどのような状態であれ、本ガイドの内容は、あなたを念頭に置いて書かれています。最終的な願いは、これらの短く、焦点を絞った13回の研究を通して、今期、あなたが改めてイエス・キリストを尋ね求める中で、彼に対する愛と献身に再び目覚めることです。

今回の主題が「関係」に関するものなので、この『聖書研究ガイド』は、これまでのものとは少し異なり、各研究が、より個人的なスタイルで書かれています。なぜなら、**あなた**を個人的に知りたいと願っておられる個人的な神についての研究だからです。

エレン・ホワイトは、「キリストのうちにあつて矛盾のない生活は、一つの大きな奇跡である」(『希望への光』882ページ、『各時代の希望』第44章)と述べています。また聖書は、生涯にわたる神との関係〔life's journey with God、神と共に歩む人生の旅路〕を、レースという比喻を用いて表現しています。私たちの報いは、朽ちない冠(1コリ9:24、25)と、神と共に生きる永遠の命です。私たちの霊的なレースは、短距離走ではなく、マラソンです。走るのをやめたり、転倒したりすることもあるかもしれません。それはよくあることです。そうなったときに、私たちは立ち上がり、進み続ければよいのです。避けられない試練や困難に直面しても、私たちは走り続けなければなりません(ヘブ12:4～11)。しかも、私たちはこのレースを1人で走るではありません。イエスと御言葉を愛するほかのランナーが、私たちと共に走っています。そして何よりも重要なことに、イエスは私たちに助け主を送ると約束してくださいました。「わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるのであろう。それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである」(ヨハ14:16、17、口語訳)。

私たちは人生のレースを1人で走っているではありません。助け主は私たちと共におられるだけでなく、私たちの内に宿り、私たちが走りつつ、「信仰の創始者また完成者であるイエス」〔口語訳「信仰の導き手であり、またその完成者であるイエス」〕(ヘブ12:2)に目を留めるとき、私たちを強め、支えてくださいます。

私はこの文章を書きながら、聖霊が私たち個人に、また世界教会としての私たちに働きかけ、これまでになかったほど神に近づけてくださいと祈っています。なぜなら、神との強い関係を持つこと以上に大切なことはないからです。

ですから、共に研究し、学び、愛し、そして神につながりましょう。

〈著者〉ニーナ・アッチソン（世界総会の安息日学校カリキュラム「アライブ・イン・ジャーザス」の責任者兼上級編集者）

2

### I コリ 9:24、25 （新共同訳）

9:24 あなたがたは知らないのですか。競技場で走る者は皆走るけれども、賞を受けるのは一人だけです。あなたがたも賞を得るように走りなさい。

9:25 競技をする人は皆、すべてに節制します。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするのですが、わたしたちは、朽ちない冠を得るために節制するのです。

### I コリ 9:24、25 （口語訳）

9:24 あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。

9:25 しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。

ヘブ 12:4~11 (新共同訳)

12:4 あなたがたはまだ、罪と戦って血を流すまで抵抗したことがありません。

12:5 また、子供たちに対するようにあなたがたに話されている次の勧告を忘れていません。「わが子よ、主の鍛錬を軽んじてはいけません。主から懲らしめられても、力を落としてはいけない。

12:6 なぜなら、主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、鞭打たれるからである。」

12:7 あなたがたは、これを鍛錬として忍耐しなさい。神は、あなたがたを子として取り扱っておられます。いったい、父から鍛えられない子があるでしょうか。

12:8 もしだれもが受ける鍛錬を受けていないとすれば、それこそ、あなたがたは庶子であって、実の子ではありません。

12:9 更にまた、わたしたちには、鍛えてくれる肉の父があり、その父を尊敬していました。それなら、なおさら、霊の父に服従して生きるのが当然ではないでしょうか。

12:10 肉の父はしばらくの間、自分の思うままに鍛えてくれましたが、霊の父はわたしたちの益となるように、御自分の神聖にあずからせる目的でわたしたちを鍛えられるのです。

12:11 およそ鍛錬というものは、当座は喜ばしいものではなく、悲しいものと思われるのですが、後になるとそれで鍛え上げられた人々に、義という平和に満ちた実を結ばせるのです。

ヨハ 14:16、17 (新共同訳)

14:16 わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください。

14:17 この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内からである。

ヘブ 12:4~11 (口語訳)

12:4 あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流すほどの抵抗をしたことがない。

12:5 また子たちに対するように、あなたがたに語られたこの勧めの言葉を忘れていない。「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけません。主に責められるとき、弱り果ててはならない。

12:6 主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである。」

12:7 あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである。いったい、父に訓練されない子があるだろうか。

12:8 だれでも受ける訓練が、あなたがたに与えられないとすれば、それこそ、あなたがたは私生子であって、ほんとうの子ではない。

12:9 その上、肉親の父はわたしたちを訓練するのに、なお彼をうやまうとすれば、なおさら、わたしたちは、たましいの父に服従して、真に生きるべきではないか。

12:10 肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである。

12:11 すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思わず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる。

ヨハ 14:16、17 (口語訳)

14:16 わたしは父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。

14:17 それは真理の御霊である。この世はそれを見ようともせず、知ろうともしないので、それを受けることができない。あなたがたはそれを知っている。なぜなら、それはあなたがたと共におり、またあなたがたのうちにいるからである。

ヘブ 12:2 (新共同訳)

12:2 信仰の創始者また完成者であるイエスを見つめながら。このイエスは、御自身の前にある喜びを捨て、恥をもちとわなないで十字架の死を耐え忍び、神の玉座の右にお座りになったのです。

ヘブ 12:2 (口語訳)

12:2 信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもちとわなないで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。